

第13回「泉大津市オリウム随筆賞」

【オリウム随筆賞（佳作）】

二枚目のハンカチ

原 稔宏・徳島県阿南市

二十歳までは、ハンカチを持つことなんてなかった。手を洗えば、上着かズボンのお尻で拭けばいい。男子だけに限るのだろうが、そういう人は多かった。けれど、大学三年のあの出来事から、私はハンカチを一枚…、ではなく二枚持つことが習慣となっていた。

東京の教育大学に私は進学した。七月に教育実習があり、府中の小学校にお世話になった。四年三組、担任の先生は中堅の女性で、学級経営がきっちりとしていて、教えるのがすごくうまくて、クラスの子供からも人気があった。失敗ばかりの私に手取り足取り優しく教えてくれた。尊敬できる先生で、こんな教師になればとずっと思っていた。それに綺麗で…、つまり憧れの人なのである。

この日は、ぎらぎらとした太陽の照り返しで上から下からと攻撃され、じりじりと体が燃えてしまいそう。まるで熱したフライパンの上にいるようであった。木の高い所でアブラゼミが鳴き、ずつと向こうには真っ白な入道雲がもくもく湧き立っていた。梅雨明けの今日、夏が本気になっていると感じた。

二時間目の体育の授業見学が終わり次の時間は算数で、それは私の評価授業であった。外体育の後の子供はそのままロング休みで、元気に遊んでいる。私は授業の準備のため、教室へと走った。体育の時間、鬼ごっこゲームで子供と一緒に走り回ったため、顎から汗が滴り落ちてくる。それをワイシャツの袖口でぬぐう。ぬぐっても次々と出てくる。当時は冷房設備どころか、扇風機さえも教室にない。暑くてたまらない教室で、『面積』の単元に必要な用具、そして昨夜、手作りした教材を出していく。あと五分で子供が入ってくる。緊張…汗がさらに吹き出してくる。

と…、担任の先生が教室に入ってきて、「はい」と差し出した。目をやると、きつちりと折り目の入った真っ白なハンカチ。使うのがもったいない思いがあり「汚くなるので」と丁寧にお断り。すると、「ハンカチはきれいにするためにあるの」と言って、体操服のポケットからもう一枚、ハンカチを取り出した。それは薔薇の花柄の、何度も使ったような気配のもの。「二枚も？」の問いに、「いつも二枚持つてるの。一枚は自分のため。もう一枚は人のため」とさり気なく言い、先生はそれで自分の額の汗を拭いた。「ありがとうございます」と、頭を下げて受け取り、ハンカチを開け、顔にあてた。みるみる汗が布に染み込んでいく。ほのかに夏の太陽の香りがした。

評価授業はまずまずで、参観された先生方からお褒めいただいた。白いハンカチは洗った

もののアイロンがないため、しわしわ。だから新品を買って返すことにした（銀座で買った少々、高いやつ）。先生は、「こんな高価なハンカチ。いいのに…」と苦笑した。

地元の徳島で教師になり、三十五年勤め上げ、三年前に定年退職した。昨年の冬、同窓会があり、私は招待された。そのとき、「先生、このハンカチのこと、覚えてますか？」とハンカチを差し出したAさん。Aさんは四十で、お子さんは小学生の女の子が一人いる。

忘れてはいない。というか、ハンカチをまだ持っていてくれるんだとびっくりした。そして、うれしかった。その年、六年生を受け持った私は、クラス全員に卒業祝いとして真っ白いハンカチを渡したのだ。

「二枚のハンカチの話をしてくださいましたよね。教育実習生のときの担当の先生のことを。私、感動したんです。二枚目は人のためっていうこと。私もいつか誰かのためにとって持ち歩いてるんです」と、Aさんは二枚目のハンカチを使った出来事を話してくれた。

知らない人がひざを怪我したときに差し出したこと、風邪で咳が出る友達に貸したこと、ナプキン代わりに使ってもらったこと…そして、「彼との結婚も、実は二枚目のハンカチなんですよ」「というと？」興味津々である。「聞きたいですか？」気になるじゃないか…

トイレから出てきた彼は手をぶるぶる振っていた。自然乾燥させているのを見て、「ハンカチ持っていないでしょ？」と二枚目のハンカチを渡す。別の日には、コースター代わりに二枚目のハンカチを、彼の自動車のキーをハンカチの上に置いたり。さりげない気遣いが彼は気に入ったのだと。「持っているだけで心が優しくなっていくようで。だから娘にもハンカチを二枚持たせてるんですよ。もちろん、彼にも」と笑顔を見せた。

遙か昔、教育実習の先生からの二枚目のハンカチが、こんなふうにして受け継がれているのか：帰ってすぐ、洋服タンスの一番上の引き出しを開ける。そこには五十枚ほどのハンカチがある。一番奥に仕舞ってあるビニル袋に入った真っ白なハンカチ。それを取り出す。スーと鼻に当てる。おもむろに目を閉じる。鼻腔の奥で、あの夏の香りを感じた。そして苦笑していた先生のあの顔も…